

Ⅷ. 普及の体制と課題

1. 肉用牛放牧を普及することの意義

人の手に負えず困り果てていた耕作放棄地に牛を放牧すると、多くの多面的な効果が生まれることはすでに述べたとおりです。まさに災い転じて福となす現象であり、「放牧のメリットは逆転の効果である」と言えます。

地域には、農業組織や自治会、町づくり団体などがあります。それぞれの立場の住民が協力して放牧牛を飼うことになれば、その恩恵は地域の皆で享受することができ、地域がひとつにまとまることができます。

国土の保全や食糧自給の問題から、農村の再生が強く求められている今日、放牧は畜産農家の経営改善や耕作放棄地の解消にとどまらず、ふるさとの田園風景を取り戻し、異なる立場や世代の人たちが再びつながるための手法として活用してこそ真の価値を発揮するものであると言えるでしょう。

2. 山口県の先進的な取り組みに学ぶ

山口県では、平成18年度実績で200か所200haを越える放牧が実施されています（図27）。もう20年も前から耕作放棄地や水田放牧に取り組んできた山口県の「山口型放牧」は、放牧の推進に必要な要素を取り揃えています。県、市町村、JAが、「放牧は地域振興」との意識を共有し、地域の現状把握に基づいて、積極的に働きかけを行ってきました。その熱意ある取り組みが浸透し、農家や住民の自発的な活動へと発展していったことが急速な普及の要因です。

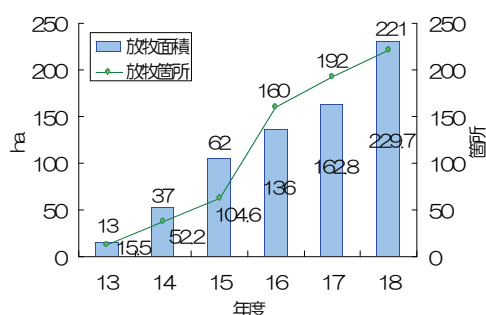


図27. 山口県の放牧の実施状況
島村真吾（2007）：「放牧推進と施策の活用について」第7回放牧サミット基調講演資料より

「農業・環境・地域が蘇る放牧維新」（吉田光宏著、農文協、2007）と第7回放牧サミット基調講演資料「放牧推進と施策の活用について」（島村真吾、2007、<http://souchi.lin.go.jp/event/summit/summit07.pdf>）を読めば、山口型放牧のすべてがわかります。

山口県では、農家と住民が安心して取り組める次のような普及体制を整備しています。

●明確な役割分担による普及活動

- ・各機関の役割分担と窓口の明確化
- ・行政・公的機関が放牧計画や土地の集積等地域の合意形成に積極的に関与、普及担当者が農家とともに現場管理に通いつめ放牧の効果を実証

●有効な支援策の充実

- ・県有牛のレンタルから発展して畜産農家の牛をレンタルするカウバンク制度を創設
- ・県・JA・市町村が放牧セット（電気牧柵や移動スタンション等）を所有し貸出し
- ・県畜産試験場内に設置した馴致施設で農家牛の放牧トレーニングを実施

●「山口型放牧研究会」の設立によるネットワークの構築

・有志による自発的な研究会組織による現場技術の集積と情報の共有・発信

3. 近畿における普及のための課題

（１）行政的課題

①行政課題としての位置づけ

放牧は高騰する飼料費や労働力、牛の健康面で畜産農家のプラスとなるばかりでなく、農山村の保全や地域振興につながる有望な手法です。このことを広く関係部局や市町村で意識を統一し、住民に向けて情報発信する必要があります。

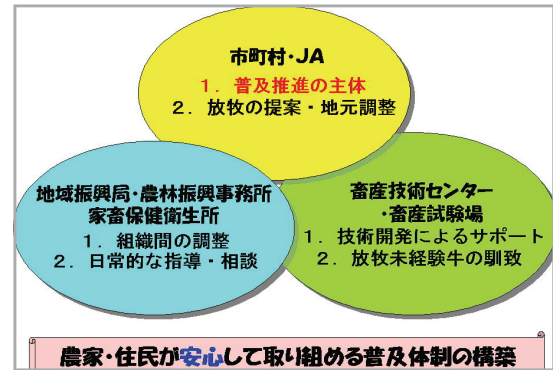


図28. 市町村・JAを主体とする普及体制
澤井利幸（第5回放牧サミット、2005）「耕作放棄地を活用した山口型放牧技術の確立と推進体制の構築」を参考に作成

②キーマンは市町村・JA

地域の最前線で農村の問題を住民と共有している市町村やJAが推進力となり、これを県の行政、普及、研究機関が支援する体制が望ましいと考えられます（図28）。

③NPO・民間との協力

過疎により人の力が弱体化した地域では、NPOなどの人や組織のネットワークが、放牧を活用して農地の保全や都市と農村の交流を行い、地域の支援を担うような形態のさらなる進展が望まれます。例えば、兵庫県で行われているように（写真5）、棚田ボランティアの草刈り作業を牛に代行させれば、棚田ボランティアのパワーアップにもなり、同時に活動の楽しみも増すかもしれません。将来的には、人の少ない限界集落の放牧地を巡回して管理をしてくれる放牧管理請負人のような人たちの登場も望まれるところです。

④支援制度・システムの整備

現在、近畿管内の府県にも牛を貸し出すレンタル制度がありますが、希望者が年々増え、府県の所有する牛では対応できない状況になっています。今後は、畜産農家の牛を貸し出す制度も望まれます。併せて放牧牛をトレーニングする馴致施設の設置等も必要です。

今後、放牧牛の導入を希望する集落に対する放牧用の牛の供給体制も整備していく必要があります。集落によっては積雪期に牛を飼う場所がない、分娩や子牛の管理にまだ不慣れであるなどの様々な事情も予想されます。冬の間、畜産農家等へ牛を預託する、あるいは山地や日本海側などの積雪地から牛を移動させて平場の耕地を有効利用するなどの補完システムがあると普及の可能性が広がります。畜産農家の牛の預託事業を行っている公共育成牧場の参画も期待したいところです。

※国の支援事業：放牧推進のための次のような国の支援事業があります。

●放牧牛貸付制度構築事業

放牧経験牛の貸し出しを行うレンタカウ制度の仕組みを地域に構築するための事業です。

牛の導入から放牧の実証、電気牧柵等の放牧施設の設置までに必要な経費を支援します。

●（独）家畜改良センターによる放牧牛の有償配布

耕作放棄地等へ放牧利用する肉用牛の有償配布を行っています。

⑤福祉・教育分野や都市農村交流資源としての放牧の活用

見つめ合うという行為は心理的な緊張感を高めますが、目が横の方にある牛の顔は、イルカなどと同じく、向き合ってもあまり緊張感を高めません。人に慣れた牛のおだやかでゆっくりとした動作には、人の気持ちをほっとさせる作用があります。

また、自然には、人間の本質的な存在に欠かせない意欲や気力を回復させる力があります。環境教育の野外塾では、基本的にプログラムを組まなくても、何も無い山中に放り込まれた子供たちが、川遊びや焚き火、基地作りなどの野遊びに興じるうちに、旺盛な食欲や元気を復活させることが知られています。

人間の本能に直接働きかける自然からの刺激と家畜とのふれあいから得られる安らぎを、子供だけでなく現代人の人間回復に役立てる都市農村交流の場として、里地・里山の放牧地が果たす役割は大きいと思われます。福祉や教育、都市農村交流の分野への積極的な活用が望まれます。



写真129. 放牧地横で田植え大会（滋賀県）

（２）技術的課題

①省力低コストの周年放牧技術の追求

現在は春から秋の妊娠牛の放牧がほとんどですが、低コストで子牛を生産する周年放牧技術が確立されれば、放牧を取り入れる集落や畜産農家にプラスとなります。地域の環境条件や目的に合った草地化技術や冬季の飼料の確保、子牛の人への馴致技術、育成技術などが課題です。

また IT 技術を応用して、遠隔地やサポートセンターで牛の行動や健康、発情や分娩などをモニターできれば、初心者や過疎地でも安心して放牧ができます。

②放牧による牛肉生産

和牛には、黒毛和種の他に褐毛和種、日本短角種、無角和種などがいます。これらの品種は、霜降り肉の黒毛和種に対して、脂肪の少ない赤肉で、粗飼料の利用性が高く、黒毛和種よりも放牧向きの牛たちです。霜降り志向と高収益性から黒毛和種が最も多く飼われていますが、最近、健康志向や穀物高騰から、これらの和牛が見直されています。有名なところでは、阿蘇のあか牛、土佐のあか牛（褐毛和種）、東北地方の日本短角種です。

これらの肉の特徴は、低カロリーで、ビタミンEが豊富、悪玉コレステロールを減らす α -リノレン酸や体脂肪代謝を活性化するカルニチン、抗ガン作用のある共益リノール酸などの機能性成分が多く含まれることです。これらは放牧で十分に運動して牧草を食べることによるので、繁殖共用を終えた黒毛和種経産牛を放牧で飼養した場合の牛肉も同様の

成分が高くなることがわかっています。赤肉の肉質を向上させるために、日本短角や褐毛和種に黒毛和種をかけ合わせて交雑種を作る試みも行われています。

こうしたことを背景に、もっと放牧を広めようと、放牧実践農場や放牧によって生産された畜産物を対象とする**草地畜産基準認証制度**も創設されます。霜降り肉にこだわりすぎると、赤肉のシェアを外国産牛肉に奪われかねません。国内資源を活かした健康によいロープライスの牛肉作りが求められています。

③環境保全型放牧技術の確立

牛を使った里山の環境保全や奥山の自然回復など生物多様性に貢献する放牧技術の確立、指針作りが望まれます。

④全く新しい発想の研究：例えば小型化

牛が家畜化された歴史は紀元前5千年前に遡ります。狩猟対象であった野生牛を家畜化する段階で、人が扱いやすいように、牛の体格は小さくなりました。家畜化の初期から肉用と言うよりは農耕用として使われ、メソポタミア、エジプト、インダス、黄河の古代文明のいずれもが、牛を使った犁農耕を基盤として成立していました。世界の各地にはまだ体重350kg程度の小さな牛が残っています。

わが国へは稲作の伝来とともに渡来したと考えられ、遅くとも4世紀末から5世紀初めには、牛馬による耕作が広がっていたようです。昭和中期頃、まだ農耕や運搬用に使われていた牛は、写真131のように今と比較するとやや背が低くほっそりした体格で、これは（社）全国和牛登録協会の資料からもわかります（表20）。

牛の草刈り能力は抜群です。ヤギやヒツジに同じ仕事をさせようとするとなくさんの頭数が必要となり、病気や事故の機会が増えるなど、管理が大変です。むしろ大きな牛を少数飼う方が楽であると言えます。しかし、肉用に改良された今の牛は大型で、素人には扱



写真130. 丹後日本海牧場の日本短角（京都府）



写真131. 京都大原野の竹やぶで肥料をやってタケノコを育てるために荷車を引く牛
（財）世界人権問題研究センター所蔵 符川 寛氏撮影（昭和36年（1961年頃）、京都府レッドデータブック 下巻 地形・地質・自然生態系編、2002 掲載）

表20. 昭和30年（1955年）頃と現在の黒毛和種雌牛の体格の比較

	昭和30年頃	現在
体高	123cm	128cm
体重	350kg	510kg

（注）35か月齢時の比較：平均ではなく上限値と下限値の中央値（新・和牛百科図説、（社）全国和牛登録協会、1992 掲載の発育曲線より作成）

いにくく思われることも事実です。

牛を扱った経験のある世代が次第に少なくなることや肉以外の多面的用途に使えることを考えると、これからは、もっと山地や里地での行動能力や採食能力や繁殖性、泌乳能力を高めた小型の牛を作る研究もあってよいのではないかと思います。

4. 普及を目指した府県の取り組み

(1) 近畿管内における放牧牛貸付制度（レンタカウ制度）

レンタカウとは、県など行政が仲介して、「耕作放棄地を解消したい」「山の景観をよくしたい」など牛の放牧を希望する人に牛を貸し出す制度で、貸与された牛を放牧して草がなくなれば、牛を返却します（表21）。

草刈りのための人件費や農機具代がかからないだけでなく、牛の餌代も節約でき、牛の貸し手・借り手双方にメリットがあります。近年は府県所有牛の貸し出しだけでなく、畜産農家の所有する牛を貸し出す仕組みもみられます。

表21. 近畿各府県のレンタカウ制度

府県名 市町村名	牛の所有者 (所有団体)	貸出可能 牛総数	貸し出し実 績(H20)	料金等
滋賀県	滋賀県畜産技術振興センター	20	6	無料 (利用は2カ年に限る)
京都府	京都府畜産技術センター・淀高原牧場	12	12	レンタル料:72円/ 1日/1頭
京丹後市	畜産農家	2	2	輸送費:10,000円
奈良県	奈良県畜産技術センター	6	4	レンタル:無料 輸送費:借受者負担
和歌山県	和歌山県畜産試験場	4	8	無料

(注) 兵庫県は現在検討中

(2) 滋賀県： 滋賀県型和牛放牧

滋賀県では、集落等が和牛放牧を実施することによって、放牧の多面的機能（農林地の保安全管理、獣害防止、豊かな農山村の景観形成、家畜とのふれあい、近江牛の生産拡大等）を活用して地域振興を図ることを「滋賀県型和牛放牧」と定義し、レンタ

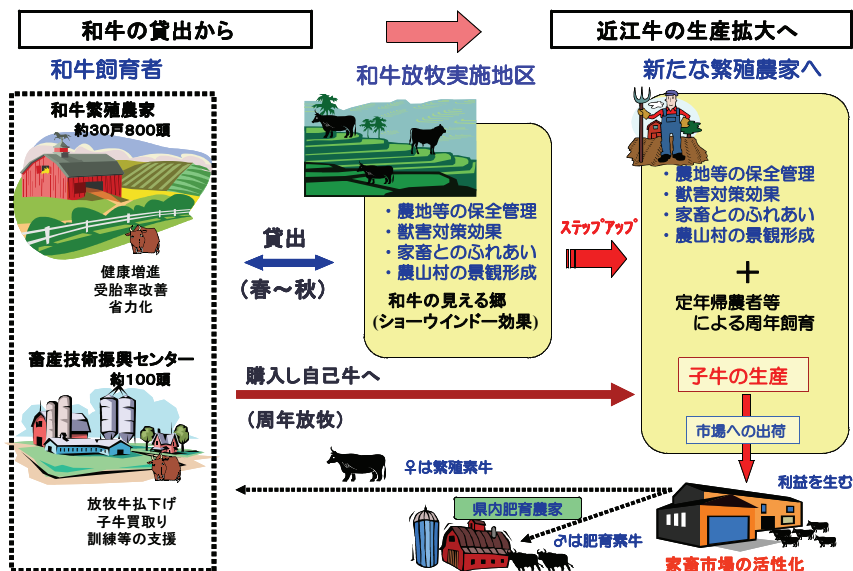


図29. 滋賀県型和牛放牧

ルから牛の導入へのステップアップを推進しています（図29）。

(3) 京都府： 地域サポートカウ事業

京都府は、平成20年度から「地域サポートカウ事業」を始めました（図30）。これは

放牧推進会議が中心となって、地域へサポートカウを斡旋し、NPOなどの民間活力を活かしながら、耕作放棄地の解消のみならず学校行事や

都市住民交流などにも役立てる取り組みを展開し、最終的には集落で牛を導入することを目指しています。

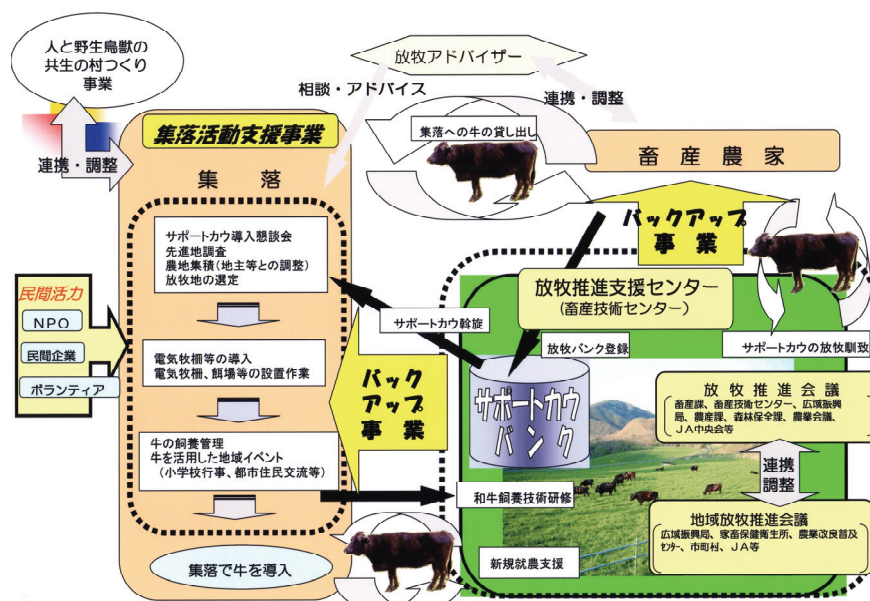


図30. 地域サポートカウ事業（京都府）

(4) 兵庫県：兵庫県放牧研究会

但馬牛の放牧の歴史の古い兵庫県では、平成7年に県全域への放牧の定着を目指して「兵庫県放牧研究会」が設立されました（図31）。

県機関と市町・団体で構成され、活動は、検討会や研究会の開催、毎年課題を設定しての調査研究の実施、技術資料等の作成・配布です。

これまでに、放牧マニュアル・事例集やワラビ中毒発生予防指針などを作成し、放牧の拡大に貢献してきました。今後は畜産主体の活動から、集落・畜産の連携へ向けた新たな展開が始まっています。

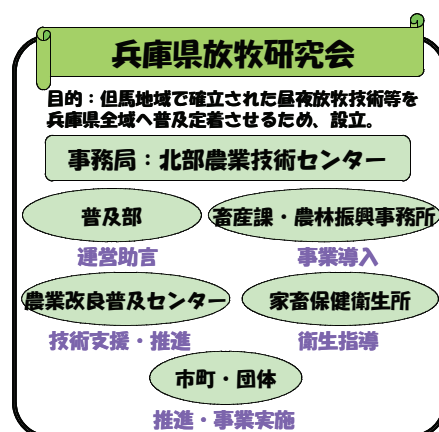


図31. 兵庫県放牧研究会

5. 普及のポイントは“無理をしないこと”

放牧の良さは、手間がいらぬ、経費がいらぬ、難しい技術がいらぬ「3いらす」の技術であることです。広い場所でまばらに飼うから環境問題が起こらず、コストも労力もかからないのであり、生産性を高めようと無理をすれば、第三者に迷惑をかけ、仕事も大変になります。“ゆっくり、ゆるやかに”これがキーワードです。

また、何か不都合が生じたらいつでも中止し、引き上げる用意をして臨むことも必要です。慣れてきたら、楽しみながらチャレンジをして行けばよいのです。柔軟に牛が住ったり来たりするレンタルのシステムと自己所有してもっと活用したいという人たちを支援するシステムの両輪での推進が必要と思われます。